

探訪! 最新の整備工場

冷暖房で快適、作業効率を追求

秋田スズキは1954年創業。県内に9店舗を展開しています。2年前に秋田市の本社社屋とショールーム秋田本店、整備工場を新築しました。効率的な稼働により生産性向上を図るため、工場設備の配置を工夫。整備士の快適さや作業のしやすさにも配慮しました。

工場を訪れると、北側の壁一面を覆う自動シャッターが目を引きまします。冷暖房完備のため外気が流れ込まないよう

シャッターは閉じられており、車両の入出庫の時だけ開くようになっています。

工場内には車両20台分の作業スペースが設けられ、ここに18台のリフトが並びます。このうち出入り口に近い2台は軽作業用。簡単な点検や作業は入り口付近で行い、時間のかかる整備は奥のリフトを使用します。中央には車両データなどを入力するガラス張りのコントロールルームが設けられ、整備士



が工場全体を見渡しながらか作業できるようになっています。通路は広く、整然と片付いていました。

工場内には車両用リフトが並び



整備工場入り口の自動シャッター



工場中央でデータ入力を行う

課題は人材確保、働き方改革進む

働きやすい職場をつくる動きは、県内に広がり始めています。各地の整備工場では、タイヤ交換用の補助器具を導入するなど、整備士の重労働を軽減する取り組みが目立ちます。

背景にあるのが、少子化に伴う人材確保の問題。若者が減り新卒整備士の

採用が徐々に難しくなっています。小規模工場ほど人材不足が顕著だとわれています。

一方で本県は乗用車の保有率が高い傾向が続いています。東北運輸局のまとめによると、2021年3月末時点の本県の乗用車保有数は58万8796

台。一般財団法人自動車検査登録情報協会が公表した同年3月末の本県の「自家用乗用車の世帯当たり普及台数」は1.38台で、15年前と同水準でした。

県内の整備工場や自動車販売店の多くが、車社会を支える整備士の確保と定着に力を入れており、労働環境の改善が大きく前進しています。

1世帯当たりの
自家用乗用車普及台数

(秋田県)

1.38台

2021年3月末時点



INTERVIEW

「やる気がある人にどんどん挑戦してもらいたい」



秋田スズキ 石黒 寿佐夫 社長に聞く

整備工場新設の狙いや整備士の育成について、秋田スズキの石黒寿佐夫代表取締役社長に聞きました。

—工場に最新設備を導入した狙いは。
「本県の人口は今後、都市部に集中すると見込んでいます。将来、県央部の業務を秋田本店に集約することを見据えて大きな設備投資を行いました。当社に限らず、かつての整備工場は「夏は暑く、冬は寒い」が当

たり前。重い部品を持つ仕事も多くありました。営業や事務職は冷暖房が効いた部屋で働くのに、整備士だけが暑さや寒さで苦労しているのは不公平です。工場新設を機に、これらを改善したいと考えました」

—整備士が働きやすい環境づくりに力を入れる理由は。

「当社は『乗物でしあわせ運ぶ』をモットーに、企業理念の一つに『社員がイキイキと働き自己の成長に努めること』を掲げています。この理念を実現するには整備士に限らず、全社員が働きやすい環境を整えることが必要です。整備士と営業担当が連携しやすい雰囲気をつくったり、休暇を取り

やすくしたり。職場づくりは、お客さまの信頼を得る上でも大切です」

—国家資格の取得を目指す人材を採用して整備士に育てたり、女性整備士を積極的に雇用したりしています。

「車の安全と人の命を守る整備士は、社会に欠かせない職業です。やる気がある人にどんどん挑戦してもらいたい。『やってみなはれ』の心意気で見守っています。若い社員に任せた仕事は、経験豊富な先輩がしっかり確認します。指導体制をつくることで、今後の人材育成につなげたいと考えています」